高齢者の生活支援活動に参加する住民の属性（２）

—大垣市のライフサポーターの属性—

Analysis of Participants in Support Activities for Aged Persons (2)

−Case Study of *Life Supporters* in Ogaki, Gifu−

小　林　月　子
Tsukiko KOBAYASHI

Along with the rapid aging in Japan, the number of aged persons who need nursing care has increased. They need informal supports/services along with formal services provided by long-term care insurance. In Ogaki, Gifu, a group named Life Supporters started providing informal supports to aged persons requiring nursing care. This paper deals with characteristics of its active members.

キーワード：地域，介護保険，生活支援活動，住民・参加者，ＮＰＯ
Keywords：community, long-term care insurance, life support activities, inhabitants/participants, NPO

1　はじめに
2　ライフサポート活動（大垣市）の概要
3　これまでの分析で判明したこと
4　活動に積極的なライフサポーターの特徴
5　おわりに

1　はじめに

2000年に発足した介護保険は，介護が必要になった高齢者の生活を支えるためにこれまで大きな貢献をしてきた。家族による介護負担を大幅に減らし，社会的入院をかなりの程度減らした。支援が必要になった当人と家族の好む介護を選択できる仕組みとして不十分ながらも機能してきた。しかし，発足後12年を経過すると，介護保険は大きな課題に直面するようになってきた。要介護者の増加に伴って，人材の不足・財源の不足が大きな問題となってきたのである。介護保険の総費用をみると，発足時（2000年度）には3.6兆円であったが2011年度では8.3兆円になった。いわゆる団塊の世代が後期高齢者になる2025年には23兆円になると推計されている。一方で生産年齢人口の縮小，労働力人口の縮小が進行していく。政府統計によれば，生産年齢人口は2010年の8917万人（63.8%）から2030年の6773万人（58.1%）に落ち込むと見積もられている。今後膨大に膨らむ介護保険の財源を国民がどこまで負担できるだろうか。財源の問題は介護保険の存続にとってきわめて大きな課題である。介護保険制度を今後も維持していくためには，介護保険サービスの選択と集中を行うことが必要になるだろう。高齢者のあらゆる日常の生活援助を介護保険だけで対応することは，財政上，今後ますます困難

になっていくと思われる。

一方で，全国各地において住民による高齢者への生活支援組織，生活支援活動が誕生している。しかし，誕生した組織が必ずしも存続・発展していくとは限らない。途中で活動を停滞させ，解散してしまう組織も少なくない。他方，発足後，順調に活動の成果をあげている組織も数多くみられる。本論文の目的は，ある事例を通して，高齢者の生活支援活動の実績を伸ばしている組織の参加者の属性を明らかにすることである。活動に積極的に参加しているメンバーとそうでないメンバーの分化はいかなる組織にもみられる。積極的な参加メンバーの属性を明らかにしたい。

高齢者の生活支援活動への住民参加の必要性があれば，自動的に活動が始まり，継続して行くというものではない。参加する住民自身のモティベーションが持続・発展しなければ，活動そのものが持続し発展するとは思えない。換言すれば，参加する住民のモティベーションを持続・発展させる仕組みがあれば活動は継続され発展していく可能性が高いと言えるだろう。

2　ライフサポート活動（大垣市）の概要

岐阜県大垣市に拠点を置く「ライフサポート活動」は，2012年11月現在，あるＮＰＯ法人によって維持・運営されている高齢者への生活支援組織である。活動の正式名称もまだ無い。ここでは便宜的に「ライフサポート活動」と呼んでおこう。ＮＰＯによる福祉活動の研究を行っている安立[1]の組織分類を借りれば，その活動は「助け合い活動のみ」に位置づけられるであろう。2012年11月現在で，活動参加者はおよそ120人，月間活動時間はおよそ150時間である。活動の発端は2007年度の厚生労働省の補助事業「訪問介護事業者と連携し，福祉の視点と理念を備えた地域住民による生活支援型ライフサポーター育成事業」にある。地域住民の中から，介護保険サービスに含まれない，いわゆる制度外サービスの担い手を育成することを目的とする活動である。初年度である2007年度は大垣市が事業主体となり，翌年2008年度以降はあるＮＰＯ法人がこの事業を引き継ぎ今日に至っている。事業に興味を持った住民は，このＮＰＯの企画する教育と訓練のプログラムを終了したあと，「ライフサポーター」として地域の高齢者への生活支援活動を始めることになる。実際に「ライフサポーター」による生活支援活動開始から2012年10月で３年半が経過した。この間，登録者数は4.1倍に，月間活動時間は9.4倍に増えている。[2] 大垣市の一画に活動拠点を有している。

表１　ライフサポート活動の実績（2009年３月と2012年10月）

	サポーター登録者数	月間活動時間
2009年３月20日時点	29人	16時間 （2008年11月～2009年３月の１月当たりの平均）
2012年10月20日時点	120人	150時間
増加率（平成21年３月を１として）	4.1倍	9.4倍

資料：特定非営利活動法人　校舎のない学校「平成23年度　セーフティーネット支援対策事業補助金社会福祉推進事業：地域住民による相互扶助活動の量的・質的発展に必要な組織運営の在り方に関する調査研究事業」報告書　平成24年３月　および当該活動事務局提供の資料（2012年11月分）より作成

1 安立清史『福祉ＮＰＯの社会学』東大出版会　2008年　pp.139-145
2 小林月子「介護保険外サービスと地域の生活支援活動」岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）58巻１号　2009年

この組織による生活支援活動の手順の概要は以下のとおりである。地域に住む高齢者の中で，掃除や通院付添いなど何らかの支援が必要になった人，またはその家族またはケアマネジャーが「ライフサポート事務局」に依頼の電話を掛ける。依頼を受けた事務局は，要請に合ったライフサポーターを選び，活動の依頼をする。担当となったサポーターは，支援を必要とする高齢者の自宅等を訪問して様々な支援活動を行う。家事・庭の草取り・病院への付き添い等が主なものである。サポーターの活動は無償ではなく，有償である。利用者は１時間につき1000円を活動事務局に支払う。うち半分がサポーターの活動費（交通費等），半分が事務局経費となる。そうした支援を滞りなく行うために，サポーターは日常的に様々な学習や実習の機会を持っている。毎月一回行われる「サポーター会議」はその代表的なものである。毎月一回約２時間行われるその会議では様々なことが議論される。現場で遭遇した困難事例の検討や活動方針をめぐる話し合いが盛んに行われる。時によっては諸外国の介護事情の紹介，他の活動体との交流等も行われる。この組織には「部会」というものが設けられている。実際の援助活動のほかに「畑部会」「コーヒー部会」などがあり，自分の好みの部会に自由に所属できる。

3　これまでの分析で判明したこと

「サポーター募集」に応じて５日間に及ぶ「サポーター養成講座」を受けた住人の大半は「サポーター」として登録することになる。登録後，活動にまい進する人もいればそうでない人もいる。実際のサポート活動の実績には差が出てくる。ある人は一歩先に進んで「コーディネーター」の役割を引き受けたりする。熱心に活動に参加する人とそうではない人との分化が進んでいく。サポーターとして活動に積極的に参加しているメンバーは，どのような特徴を有しているのだろうか。当該ＮＰＯ法人による事業報告書[3]を参考にしながら，生活支援活動に参加する住民の属性を明らかにすることにしたい。

まず，当の調査について説明を加えておきたい。調査はＮＰＯ法人が行ったが，著者は調査の計画から実施に至る全過程に参加した。あらかじめ断っておきたいが，以下で引用する図表は，特に断りが無い限り，ＮＰＯ法人による事業実施報告書から引用したものである。そのため各図表に資料の出典をその都度明記することをしていない。報告書の名称は「特定非営利活動法人　校舎のない学校『平成23年度　セーフティーネット支援対策事業補助金社会福祉推進事業：地域住民による相互扶助活動の量的・質的発展に必要な組織運営の在り方に関する調査研究事業』報告書　平成24年３月」である。

１）調査について

アンケートはＮＰＯ法人によって以下のように実施された。

- アンケートの名称：「ライフサポート活動に関するアンケート」
- 調査対象：「ライフサポート講座」受講者全員（2009年～2012年）96名
- 調査期間：2011年（平成23年）11月～12月
- 調査方法：調査票を用いた郵送による配布・回収
- 回答数：64（66.7%）
- 有効回答数：61

有効回答数は61である。この数字は有意な統計的分析に十分ではないと思われるかもしれないが，傾向を知るには十分参考になると思われる。

3 特定非営利活動法人　校舎のない学校「平成23年度　セーフティーネット支援対策事業補助金社会福祉推進事業：地域住民による相互扶助活動の量的・質的発展に必要な組織運営の在り方に関する調査研究事業」報告書　平成24年３月

２）「ライフサポート活動に関するアンケート」の分析

有効回答数は61であるが，これは「サポーター登録」と「活動度」によって以下のように分類できる。

Ａグループ：「サポーター」として登録し，活動している人（33人）

Ｂグループ：「サポーター」として登録したが，あまり活動に参加していない人（19人）

Ｃグループ：サポーター養成講座を受講はしたが，「サポーター登録」をしなかった人（９人）

活動しているかあまり活動していないかの基準（ＡグループとＢグループを分ける基準）は，基本的には回答者自身の自己申告によっている。自分を「活動している」と認める人はＡグループに，「活動していない」「あまり活動していない」と回答した人はＢグループに分類された。

調査時点（2011年11月）での回答者の「サポーター」活動歴は長くて３年，短ければ１年弱であった。活動歴も活動頻度も一人一人違っている。

３つのグループのメンバーの属性の違いについての分析はすでに行った。[4] その結果を簡単に触れておこう。

（１）Ａ＋ＢグループとＣグループの違い

まずこの３つのグループは「サポーター登録」をしているかどうかを基準に２つに大別できる。ＡとＢのグループは登録したメンバーから成っている。それに対して，Ｃグループの成員は登録自体をしていない。この違いは大きい。まず３つのグループに共通している要因を挙げれば，それは「学習指向」であった。学ぶことへの意欲である。たとえば「ライフサポーター養成講座」の受講動機において３グループともに「介護についての知識や技術を学びたかった」「家族や身近な人の問題にぶつかってその解決のヒントを得たかった」と回答した人は数多くみられた。ところがＡ＋ＢグループとＣグループを明確に分ける要因が存在していた。それは「地域貢献意欲」であった。ＡグループおよびＢグループの人たちの多くが「今後地域の中で何か役立つことをしたいと思った」を第一の受講理由にしているのに対して，Ｃグループの人たちはその指向が弱かった。ＣグループではＡグループのおよそ３分の一にとどまっていた。地域貢献意欲があるかないかがＡ＋ＢグループとＣグループを分ける決定的に重要な要因であった。

（２）ＡグループとＢグループの違い

ではＡグループとＢグループの二つのグループの違いはどこにあったのか？ＡグループとＢグループは，いずれも「学習意欲・学習指向」と「地域貢献意欲，地域貢献指向」を共通して強く持っていた。二つのグループはいずれも「介護やそれに関することを学習し」「それを地域貢献という形で活かしたい」と思っている人たちの集団であると考えられる。この二つのグループを分けている最大の要因は「現在の生活状況」であった。端的に言えば，仕事中心の生活をしているかそうでないか，仕事に拘束される生活をしているかしていないか，の違いであった。現在の生活状況が「主に地域活動や趣味・ボランティア」である人はＡグループに多く，「主に仕事」である人はＢグループに多かった。仕事を引退した人たちがＡグループの主な構成メンバーだったのである。そのため，Ａグループの構成員の平均年齢の方がＢグループのそれよりも高かった。

以上がこれまでに明らかになったＡ，Ｂ，Ｃそれぞれのグループを分ける主な要因であった。

４　活動に積極的なライフサポーターの特徴

以下では[5]とりわけ，活動に積極的に参加しているメンバー（Ａグループ）の属性に注目したい。当該のＮＰＯが行った意識調査の結果をもとに議論を進めることにしたい。

4 小林月子「高齢者の生活支援活動に参加する住民の属性（１）」岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）61巻1号2012年 pp.28-39

5 小林月子「高齢者の生活支援活動に参加する住民の属性（１）」岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）61巻1号2012年

サポーターとして登録した人のうち，「活動している」に分類された人たち（Ｂグループ）の特徴を明らかにしたい。すでに明らかになっているＡグループ33人（有効回答のみ）の属性を再度要約すると以下のとおりである。

①男女比：男性15%，女性85%
②年齢：60歳以上87.9%
③現在の主な生活状況：主に地域活動，趣味・ボランティア53%，主に家事24%
④主な交通手段：車80%，自転車11%
⑤居住地：大垣市内93.8%
⑥「ライフサポート福祉講座」を知ったきっかけ：友人・知人の誘い50%
⑦「ライフサポート福祉講座」受講の動機：第１位「今後地域で役に立つことをしたい」36%，第２位「何かを学びたい16%，第３位「自分自身の老後の介護問題を考えたい」15%[6]

すでに判明した①～⑦の特徴・属性を参考にしながら，さらに詳しくＡグループのメンバーの意識と行動を解明することにしよう。自分は「活動している」と自認しているメンバーは，いかなる属性を持ち，いかなる活動をしているのだろうか。またいかなることを活動から得ているのだろうか。表２によってＡグループのメンバーの回答の特徴を概観したい。

表２　Ａグループ「登録し活動している」人たちの回答（Ｎ＝33）の概要

質問項目	回答の概要
１これまでのおよその活動回数	回答者33人，うちNA（回答なし）を除く31人（100%） ・全回答者の活動回数は0～144回に分布，その内訳は以下に ・０～９回10（30.3%） ・10～29回９（27.3%） ・30～49回５（15.2%） ・50～69回０（0%） ・70～99回５（15.2%） ・100回以上1（3%）
２　コーディネーターからサポート活動の依頼があった時の対応	・「よほどのことがない限り引き受ける」「できるだけ引き受ける」あわせて94% ・「あまり引き受けてない」3%
３「よほどのことがない限り引き受ける」「できるだけ引き受ける」 理由は何か（○は２つまで）	全回答数53（100%）のうち １位：依頼人（利用者）のお役にたちたいから18（34%） ２位：自分の力を少しでも活かせることが嬉しいから7（13.3%） ３位：サポート活動の現場で学ぶことが大いにあるから5（9.4%） ３位：ひいては自分のためになる活動だと思うから5（9.4%）
４「あまり引き受けてない」理由は何か（○は２つまで）	全回答数9（100%）のうち １位：他の活動（趣味・町内会活動等）で忙しい2（22.2%） ２位：家族の世話があり時間が取れない1（11.1%） ２位：サポート活動そのものよりもサポーター仲間との交流や学習などが楽しい1（11.1%） ２位：体調がすぐれない，体力に自信がない1（11.1%）
５これまでのサポート活動の内容	全回答数82（100%）のうち １位：掃除25（30.5%）　２位：草取り20（24.4%） ３位：片づけ8（9.8%）　４位：買い物7（8.5%） ５位：ゴミだし6（7.3%）　６位：通院付添い5（6.1%）

6 小林月子「高齢者の生活支援活動に参加する住民の属性（１）」岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）61巻1号2012年pp.27-28

６サポート活動中に困ったこと，気まずいことがあったか	あった：65% なかった：29%
７どんなことに困ったか	全記載数８件うち 訪問したが留守だった３件， 時間延長１件， 訪問先の洗濯機が動かなかった（自宅で選択して届けた）１件， 足の不自由な利用者のトイレ介助（体を持ち上げる際）に時間がかかった１件， 話すことが見当たらず，時間が長く感じた１件， 取ってまとめておいた草が散らされていた１件
８「困ったこと」の解決方法	全回答数14のうち １位：コーディネーターに相談した3 １位：自分で臨機応変に判断・対応してきた3 ３位：サポーター仲間に相談した2
９利用者へのサポート活動を行った結果，自分に身についた力は何だと思うか（あてはまるものすべてに○）	回答者33人（100%）のうち １位：現場での判断力12人（36.3%，３人に１人強が選択） １位：現場での行動力12人（36.3%，３人に１人強が選択） １位：全体的なコミュニケーション力12人（36.3%３人に１人強が選択） ４位：段取りする力8人（24.3%，４人に１人が選択） ５位：他者と相談する力7人（21.2%，５人に１人強が選択）
10部会に属しているか	属している：60.6%， 属していない：30.3% NA：9.1%
11部会活動はあなたにとってどんなところか（○は２つまで）	全回答数40（100%）のうち １位：仲間と楽しく話ができる場15（37.5%） ２位:サポート活動を広める場6（15.1%） ３位：自分の得意なことを活かして，ライフサポート活動全体を支える場4（10.0%）
12毎月１回の「サポーター会議」に出席しているか	全回答数31（100%）のうち １位：ほぼ毎月出席している18（58.1%） ２位：ほとんど参加していない5（16.1%） ３位；2〜3か月に1回4（12.9%） ４位：たまにしか参加していない（年に1〜2回）４（12.9%）
13「たまにしか参加していない（年に１〜２回）」「ほとんど参加していない」理由は何か	全回答数14のうち １位：他の活動（町内会、ボランティア、趣味等)が忙しい5 ２位：家族の世話（介護・看病・育児）があり時間が取れない2 ３位：あまりサポート活動に参加していないので何となく気おくれがする1 ３位：サポーター会議の日程が分からない1
14「サポーター会議」に参加した率直な感想は何か (○は２つまで)	全回答数45（100%）のうち １位：:ためになる16（35.6%） ２位：楽しい7（15.6%） ３位：やる気が起きる5（11.1%）
15「サポーター会議」で「楽しい」と感じることは何か (○は２つまで)	全回答数45（100%）のうち １位：あるテーマについて講義や報告を聞くこと13（28.9%） １位：仲間同士の情報交換・おしゃべり13（28.9%） ３位：事例研究・ケース検討6（13.3%）

16「サポーター会議」で「ためになる」と感じることはな何か (○は２つまで)	全回答数50（100%）のうち １位：あるテーマについて講義や報告を聞くこと18（36%） ２位：仲間同士の情報交換・おしゃべり11（22%） ３位：事例研究・ケース検討8（16%）
17「サポーター会議」で「つまらない」と感じることは何か （○は２つまで）	全回答数27（100%）のうち １位：特にない15（55.6%） ２位：あるテーマについて講義や報告を聞くこと1（3.7%） ２位：仲間同士の情報交換・おしゃべり1（3.7%）
18「サポーター会議」に参加して「特に良かったな」と感じることは何か (○は３つまで)	全回答数73（100%）のうち １位：他人の考えや発言を聞くことができること19（28.0%） ２位：新しいここを聞き、学ぶことができること13（17.8%） ２位：仲間と意見の交換ができること13（17.8%） ４位：自分のこれからの生き方や行動のヒントが得られること11（15.1%） ５位：他人の生き方を知ることができること7（9.6%）
19「サポーター会議」の内容を今後どのようにしていきたいか (○は２つまで)	全回答数44（100%）のうち １位：他の地域のサポーターとの交流会をもつ10（22.7%） ２位：あるテーマについての講義や報告を聞く機会を増やす9（20.5%） ３位：事例発表会を開催する4（9.1%） ３位：今のままでよい4（9.1%）
20自分の友人・知人を「サポーター」の仲間入りに誘っているか	全回答者33人（100%）のうち ・誘ったことがある18（54.5%） ・今までのところ誘ったことがない12（36.4%） ・今までのところ誘っていないが，今後誘ってみたい3（9.1%）
21利用者を増やすため、身近で困っている人に声かけをしてきたか	全回答者33人（100%）のうち ・声をかけてきた20（60.6%） ・今までのところ声かけしていないが，今後はしたい7（21.2%） ・声をかけたことはない4（12.1%）
22今後自分自身の身体的・精神的能力が低下し，生活するうえで誰かの支えが必要になった時，どのようにして暮らしたいか (○は１つ)	全回答者31人（100%）のうち １位：ヘルパーやデイサービスなど介護保険サービスに加えて，ライフサポーターによる支援を利用して在宅で暮らしたい25（80.6%） ２位：介護施設に入所したい3（9.7%） ３位：できるだけ家族だけに世話をしてもらいたい1（3.0%） ３位：ヘルパーやデイサービスなど介護保険サービスを利用して在宅で暮らしたい1（3.0%） ３位：病院など医療施設に入院したい1（3.0%）
23総じて，これまでライフサポーターとして数年間活動することによって，自分で得られたものは何だと思うか (○は10まで)	回答者33人中当該の項目を選択した人の割合、および全回答数149（100%）のうちに占める当該項目の割合 １位：新しい仲間・友人22（66.7%の人が選択）、全回答中14.8% ２位：誰かのためになっているという実感20（60.6%の人が選択）全回答中13.4% ３位：生きがい・やりがい15（45.5%の人が選択）全回答中10.1% ３位：新しい知識・考え方15（45.5%の人が選択）全回答中10.1%

	3 位：自分のこれからの生き方のヒント15（45.5%の人が選択）全回答中10.1% 6 位：自分の健康・元気11（33.3%の人が選択）、全回答中7.4% 7 位：これまで見過ごしてきた人たち(高齢者や障がいを持つ人など)への関心10（30.3%の人が選択）全回答中6.7% 8 位：自分自身の意識やものごとのとらえ方の変化8（回答者の24.2%が選択）全回答中5.4% 8 位：自分の身近な地域の人たちへの関心8（回答者の24.2%が選択）全回答中5.4%
24大垣市以外の地域での住民によるサポート活動に興味があるか	・少し興味がある63% ・かなり興味がある28% ・あまり興味がない6%
25他地域でのサポート活動の立ち上げに協力してみたいか	・仲間と一緒なら協力してもよい35% ・協力してみたい23% ・少しだけなら協力してもよい19% ・今のところ協力は控えたい23%

以下では，表１に挙げた項目のうち重要と思われるものをいくつかとりあげ検討したい（有効回答数33)。

（１）これまでのおよその活動回数

全有効回答者33人，うちNA（回答なし）を除く30人の分布は以下のようになっている。一見して，活動回数の多い人と少ない人に分化，２極化していると言える。さらに，活動回数が29回以内までの人がおよそ３分の２（64.5%）を占めていることが分かる。

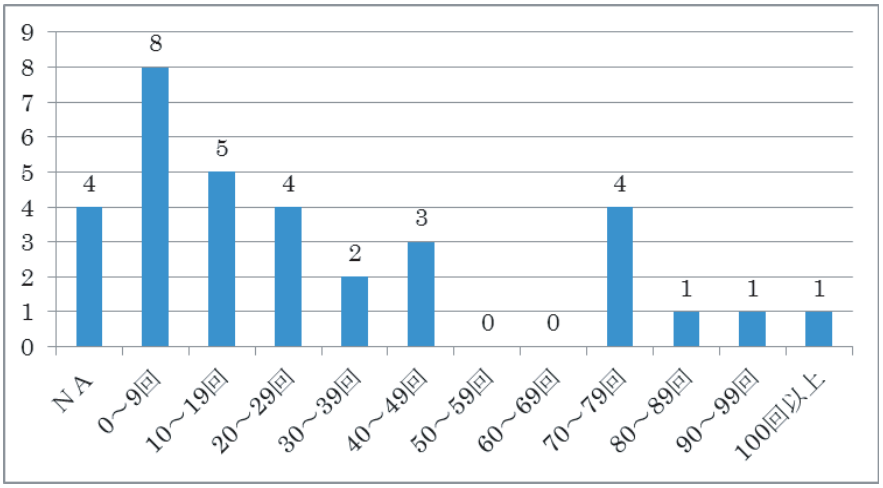

図１　これまでのおよその活動回数（人）

（２）コーディネーターからサポート活動の依頼があった時の対応：引き受けるかどうか

サポート活動への依頼への対応で最も多いのは，「よほどのことがない限り引き受ける」53%，次が「できるだけ引き受ける」41%である。あわせて94%のサポーターが，依頼があった時に「引き受ける」ことにしている。活動に対する積極的な姿勢がみられる。

（3）「よほどのことがない限り引き受ける」「できるだけ引き受ける」理由は何か（○は 2 つまで）

「よほどのことがない限り引き受ける」「できるだけ引き受ける」理由として，回答者の半分以上(33人中18人，54.5%）が「依頼人(利用者)のお役にたちたいから」を選んでいる。また33人中 7 人(21.2%）が「自分の力を少しでも活かせることが嬉しいから」を選択している。利用者のお役にたちたい，自分の力を活かしたい，現場で学びたい，自分のためにもなる，といったサポーターの心境が見えてくる。しかも，そのことが「嬉しい」と感じているサポーターの姿が浮き上がる。

（4）これまでのサポート活動の内容

サポーターはこれまで様々なサポート活動を行ってきた。サポーター自身が記入した活動内容の主なものは次のとおりである。複数回答なので，33人があげた全回答数82の内訳をみると，「掃除」「草取り」「片づけ」「買い物」「通院付添い」が主なものである。

（5）サポート活動中に困ったこと，気まずいことがあったか、，あった場合にはどのように解決しているか

65%のサポーターが，活動中に「困ったこと，気まずいこと」が「あった」と回答している。ではサポーターたちは，実際どんなことに困ったのだろうか？全記載数 8 件うち 3 件が「訪問したが留守だった」と記している。これ以外にもさまざま困ったことがあるのだが，それらに対してサポーターたちはどのように対応しているのだろうか？サポート活動は原則一人で行うので，現場での困難事態にも，とにかく一人で対応しなければならない。「コーディネーターに相談」できる状況であれば相談するし，その場ですぐに対応しなければならない時は，「自分で臨機応変に判断・対応してきた」となる。いずれにしろ，相談力，現場での判断力，行動力が求められていることは確かである。

（6）利用者へのサポート活動を行った結果，自分に身についた力は何だと思うか。

回答者数は33人，○の数は64であった。（あてはまるものすべてに○をつけてもらった)。最も多いのは「現場での判断力」「現場での行動力」「全体的なコミュニケーション力」であった。これらの 3 つの選択肢には，いずれも 3 人に 1 人強（33人中12人，35.3%）が○をつけている。他者とコミュニケーションをとりながら，現場で頭と体をフルに使って現場でサポート活動に取り組んでいるサポーターの姿が浮かび上がる。

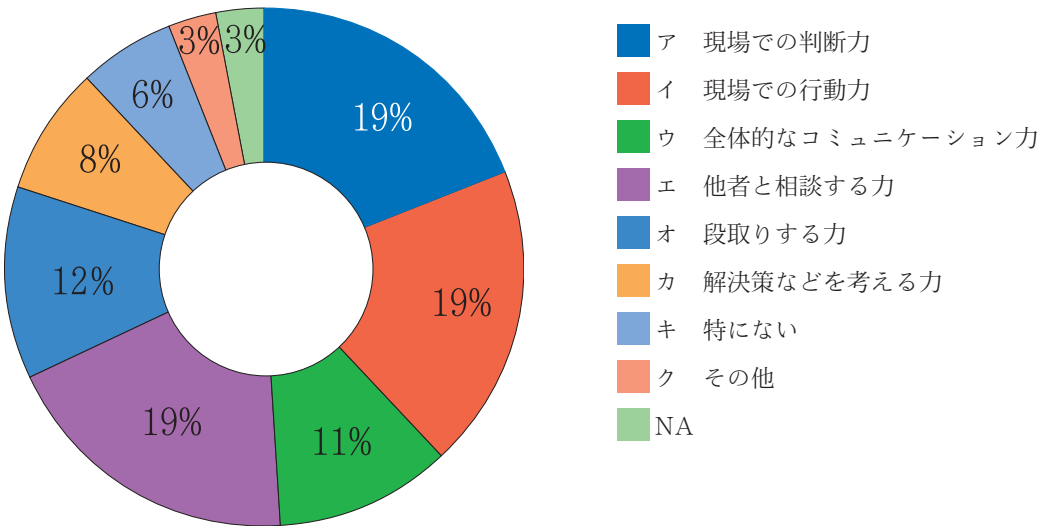

図 2　活動によって身についたと思う力

（７）部会に属しているか，また部会はサポーターにとってどのようなところか

ここには部会が３つある。「コーヒー部会」「畑部会」「当番部会」である。「企画部会」というのもあったが今はほとんど活動していない。「コーヒー部会」は月に４回ほどコーヒーショップを開いて，近くの住民や隣接する高齢者施設の関係者・訪問者に活動の広報を行っている。「畑部会」は拠点に隣接する敷地内の畑に野菜等を植えて，収穫物を皆で料理して食べたり，余れば販売したりする。「当番部会」は事務所当番をする。部会への所属は自由である。「自分は活動している」と自認するサポーターのおよそ６割が部会に所属している。

部会に所属している人にとって部会・部会活動はどんな意味があるのだろうか。

「部会活動はあなたにとってどんなところか（○は２つまで)」という問に対する回答は興味深い。全回答数40（100%）の内訳は以下のグラフのとおりである。

「仲間と楽しく話ができる場」がもっとも多く，およそ４割を占めている。サポート活動そのものが活動の中心であることは疑いを入れないが，「仲間と楽しく話ができる場」もないとサポート活動自体もスムーズに進んでいかないのかもしれない。

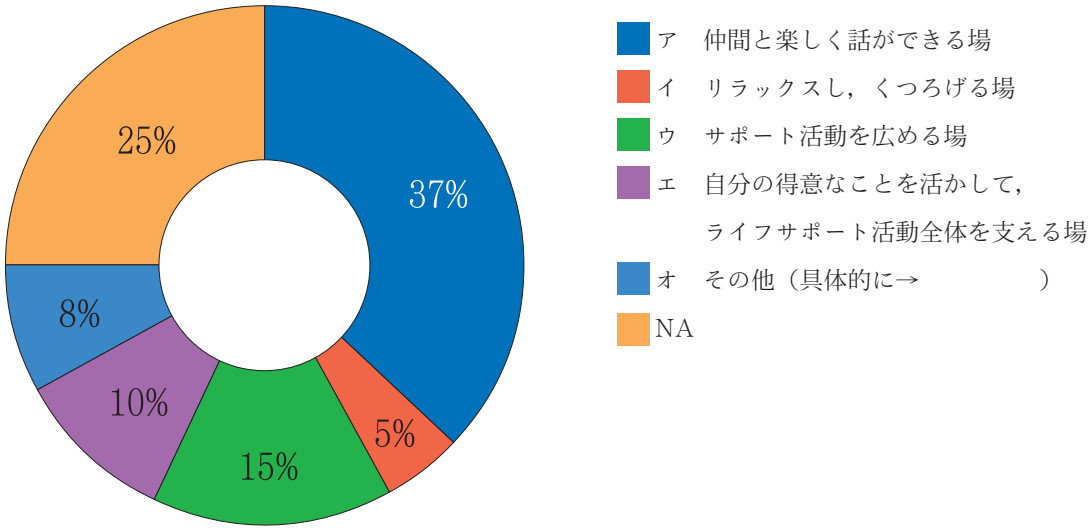

図３　部会に対するイメージ

（８）毎月1回の「サポーター会議」に出席しているかどうか，出席しない場合はどんな理由があるのか

「サポーター会議」はこの活動全体にとって，極めて重要な催しである。毎月一回水曜日か木曜日の午前中の２時間程度を使って開かれるこの会議は先に述べたサポーターたちの「学習意欲・学習指向」を充足するための機会であるばかりでなく，現場で遭遇した困難事例の解決方法を検討するために不可欠の機会である。

全回答数31のうち，およそ６割のサポーターが「ほぼ毎月出席している」と回答している。その一方で４割の人は「たまにしか参加していない（年に１～２回)」「ほとんど参加していない」と回答している。その理由のなかで最も多かったのは「他の活動（町内会，ボランティア，趣味等）が忙しい」であった。

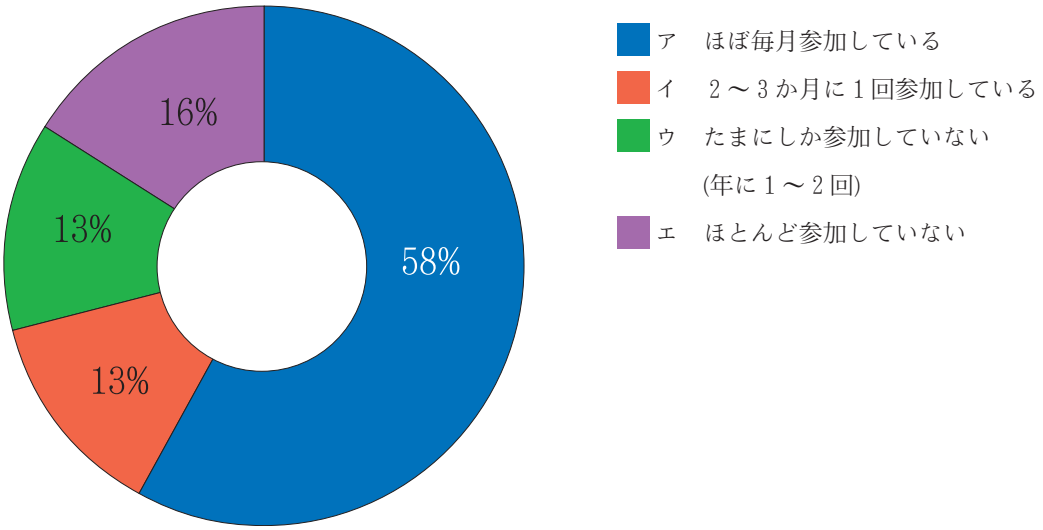

図4　サポーター会議に出席する頻度

（9）「サポーター会議」に参加した率直な感想は何か（○は2つまで，○の数は全部で45個）

サポーター会議に参加しての率直な感想の中でもっとも多かったのは「ためになる」であり，これを選んだ人は16人（○の数も16個）であった。回答者33人の約半数（47%）がこの選択肢を選んでいる。全選択肢（8つ）中に占める割合は35.6%であった。「とにかくためになる」というのが「サポーター会議」の印象らしい。

1位：ためになる16（35.6%）
2位：楽しい7（15.6%）
3位：やる気が起きる5（11.1%）

（10）「サポーター会議」で「楽しい」と感じることと「ためになる」と感じることはほぼ同じ内容

「サポーター会議で楽しいと感じることは何か」という問い（質問項目15）に対して，最も多く選択された回答項目は同数で2つあった。一つは「あるテーマについて講義や報告を聞くこと」である。もう一つは「仲間同士の情報交換・おしゃべり」である。33中13人（39.4%）が選んでいる。「仲間同士の情報交換・おしゃべり」が「楽しいこと」に分類されるのは理解しやすいが，「あるテーマについて講義や報告を聞くこと」を「楽しいこと」に選ぶサポーターがそれと同数存在していることに注目したい。「学ぶこと，新たな知識や視野を得ること」がそのまま「楽しいこと」になっているのである。そのことに注目したい。

一方，「サポーター会議でためになると感じることは何か」という問い（質問項目16）に対して，最も多かった回答は，「あるテーマについて講義や報告を聞くこと」であった。この選択肢に○をつけた人の数は18人である。全回答者33人の半数以上（54.5%）がこの選択肢を選んでいる。次が「仲間同士の情報交換・おしゃべり」で11人。3人に一人（33.3%）がこの選択肢を選んでいる。

「サポーター会議」で「楽しい」と感じることと「ためになる」と感じることがほぼ同じ内容であり，同じ順番であるということに注目したい。月1回の「サポーター会議」で最も「楽しいこと」が「あるテーマについての講義や報告を聞くこと」であり，最も「ためになる」ことも「あるテーマについての講義や報告を聞くこと」であったということになる。参加するサポーターにしてみれば「何かのテーマに関する講義や発表」を聞き，「仲間同士のおしゃべりや情報交換」をしながら「事例研究・ケース検討」に耳を傾ける。そうするなかで，かねて自分が抱えていた現場での疑問や問題の解決策が見えてくることもあるだろう。現場での問題に限らず，生活全般に関するばくぜんとした疑問

への回答が見えてくることもあるかもしれない。そうした機会が毎月１回開かれるサポーター会議であると捉えられているようだ。

（11）「サポーター会議」に参加して「特に良かったな」と感じることは何か

回答者は，12の選択肢から３つを選ぶことができる。その結果は以下のとおりである。

もっとも多くの人が選んだのは「他人の考えや発言を聞くことができること」であり，33人中半数以上の19人（57.6）がこの選択肢を選んでいる。次に多かったのは，33人中13人（39.4%）が選んだ「新しいここを聞き，学ぶことができること」および「仲間と意見の交換ができること」である。会議に参加するサポーター像を描いてみれば次のようになるだろう。会議でサポーター仲間やゲストスピーカーの話に耳を傾け，それまで自分が知らなかった分野・出来事を驚きをもって知り，仲間と意見交換しながら，自分のこれからの生き方のヒントを発見する。知的刺激に満ちた場であると言えるだろう。ちなみに，回答者がつけた73個の○のなかに占める上位５つの選択肢の割合はそれぞれ以下のとおりである。

１位：他人の考えや発言を聞くことができること19（28.0%）
２位：新しいここを聞き，学ぶことができること13（17.8%）
２位：仲間と意見の交換ができること13（17.8%）
４位：自分のこれからの生き方や行動のヒントが得られること11（15.1%）
５位：他人の生き方を知ることができること7（9.6%）

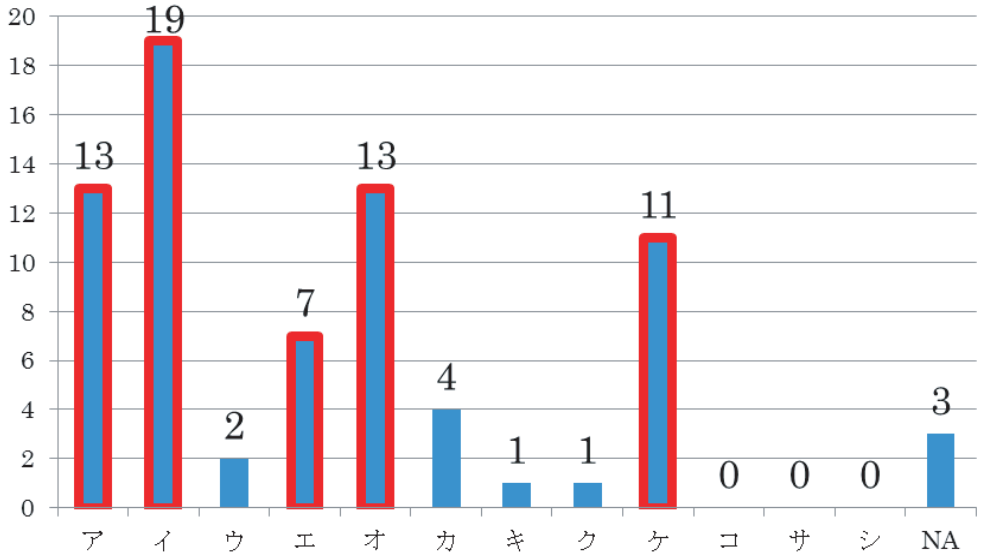

図５「サポーター会議」に参加して「特によかった」と感じることは何か

ア　新しいことを知り，学ぶことができること　　イ　他人の考えや発言を聞くことができること
ウ　自分の考えを素直に述べることができること　エ　他人の生き方を知ることができること
オ　仲間と意見の交換ができること　　カ　議論をもとに，新しい決まりや規則を作っていけること
キ　組織や会を自分たちで運営する方法がわかってきたこと
ク　他人の長所や得意なことがよくわかること
ケ　自分のこれからの生き方や行動を考えるヒントが得られること
コ　自分の長所や得意分野がわかってきたこと　　サ　特にない
シ　その他（具体的に→　　）

（12）「サポーター会議」の内容を今後どのようにしていきたいか（○は２つまで）

全回答数44（○の数）のうち最も多かったのは「他の地域のサポーターとの交流会をもつ」で33人中10人がこの選択肢を選んでいる。次いで9人が「あるテーマについての講義や報告を聞く機会を増やす」を選択した。他地域で自分たちと同じような活動をしている住民からも積極的に学びたい，できれば協働したい，という姿勢が見える。

（13）自分の友人・知人を「サポーター」の仲間入りに誘っているか

全回答者33人のうち，半数以上18人（54.5%）が「誘ったことがある」と回答している。「今後誘ってみたい」と回答した３人を含めると21人（63.6%）が，友人・知人にサポーターになることを勧めたいと考えている。友人・知人といった身近な人に声をかけるという行為は，活動に自分自身がある程度納得していなければできないことである。無責任に誘えば，肝心の友人・知人を失うことになるからである。サポーターが自分の活動そのものにかなり自信を持っていることの表れであると解釈できる。

（14）利用者を増やすため，身近で困っている人に声かけをしてきたか

回答者33人のうち，20人（60.6%）が「声をかけてきた」と回答している。「今後は声かけしたい」と回答した７人を入れると33人中27人（81.8%）が「身近で困っている人に声をかける」ことに前向きな姿勢を持っているということになる。サポート活動を通してサポーター自身が周囲の住民に関心を持つようになってきていると思われる。

（15）今後自分自身の身体的・精神的能力が低下し，生活するうえで誰かの支えが必要になった時，どのようにして暮らしたいか

全回答者31人のうち25人（80.6%）が「ヘルパーやデイサービスなど介護保険サービスに加えて，ライフサポーターによる支援を利用して在宅で暮らしたい」と回答している。活動中のサポーターの8割が自分自身の老後の生活とりわけ介護が必要になった時の生活を「サポーターの活用」を織り込んで考えていることに注目したい。

（16）総じて，これまでライフサポーターとして数年間活動することによって，自分で得られたものは何だと思うか（○は10まで。全回答者33人，全回答数149）

このアンケート中きわめて重要で包括的な設問である。数年におよぶサポーターとしての活動からどのようなことを学び発見してきたと思うかを問うている。21の選択肢の中で回答者は10の項目を選択できる。

全回答数149のうち，「新しい仲間・友人」を選んだ人は22人であった。全回答者33人のおよそ３人に２人（66.7%）がこの選択肢を選んだことを示している。次に多かったのは「誰かのためになっているという実感」である。約６割（33人中20人，60.6%）がこの項目を選択している。三番目に多いのは次の３つの選択肢である。「生きがい・やりがい」「新しい知識・考え方」「自分のこれからの生き方のヒント」で，33人中15人（45.5%）がこれらの選択肢を選んでいる。

全回答数149に占める選択された割合の高い選択肢を順に並べると以下の通りになる。

１位：新しい仲間・友人22（14.8%），33人中66.7%が選択
２位：誰かのためになっているという実感20（13.4%），33人中60.6%が選択
３位：生きがい・やりがい15（10.1%），33人中45.5%が選択
３位：新しい知識・考え方15（10.1%），33人中45.5%が選択

3 位：自分のこれからの生き方のヒント15（10.1%），33人中45.5%が選択
6 位：自分の健康・元気11（7.4%），33人中33.3%が選択
7 位：これまで見過ごしてきた人たち(高齢者や障がいを持つ人など)への関心10（6.7%），33人中30.3%が選択
8 位：自分自身の意識やものごとのとらえ方の変化8（5.4%），33人中24.2%が選択
8 位：自分の身近な地域の人たちへの関心8（5.4%），33人中24.2%が選択

主な回答をつなげると，以下のようなサポーター像が浮かび上がるだろう。
大多数のサポーターは活動を通して「新しい仲間・友人」を得て，「誰かのためになっているという実感」を得ている。そのことが自分の「生きがい・やりがい」になっている。さらにこの活動を通して，「新しい知識・考え方」を得るだけでなく自分のこれからの生き方のヒントも得ている。自分自身の生き方，物の見方が変わるとともに身近な人々や地域の人たちへの見方も変わる。他者への関心が広がっているのである。活動の過程で，自分自身の健康と元気まで手に入れている。

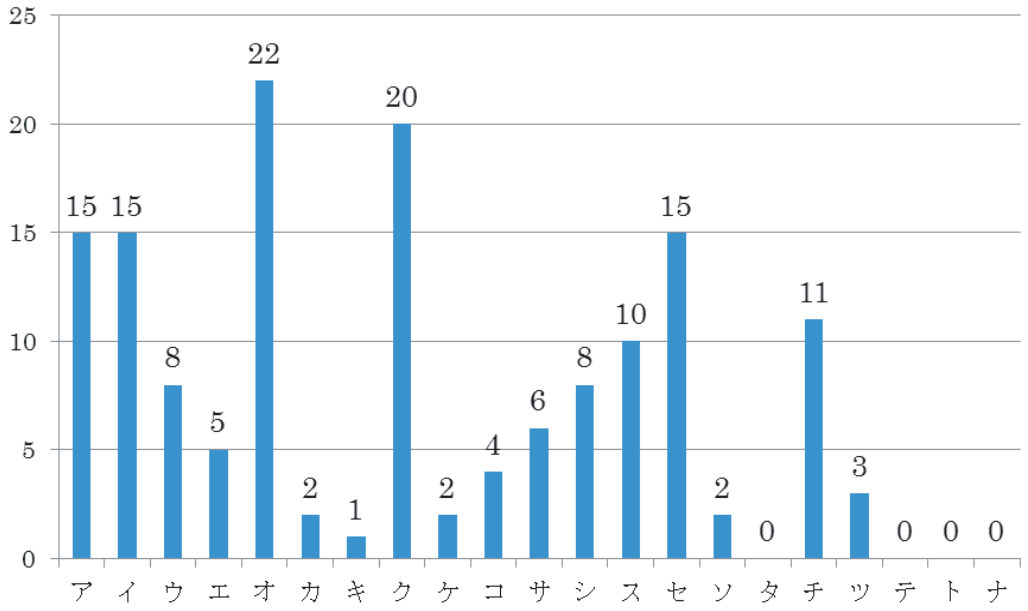

図６　サポーターとしての活動から自分は何かを得られたか（人）

ア　生きがい・やりがい
イ　新しい知識・考え方
ウ　自分自身の意識や物事の捉え方の変化
エ　自分自身の行動の変化
オ　新しい仲間・友人
カ　新たな居場所
キ　新たな役割
ク　誰かのためになっているという実感
ケ　地域社会を支えているという実感
コ　社会の動き，世の中の出来事への関心
サ　自分の身近な地域の出来事や変化への関心
シ　自分の身近な地域の人たちへの関心
ス　これまで見過ごしてきた人たち（高齢者や障がいを持つ人など）への関心
セ　自分のこれからの生き方のヒント
ソ　困ったときの相談相手
タ　新しい生活技術（携帯電話やパソコンの使い方など）
チ　自分の健康・元気
ツ　新しい楽しみ
テ　おしゃれしてみようという気分
ト　特にない
ナ　その他(具体的に→　　)

（17）大垣市以外の地域での住民によるサポート活動に興味があるか，他地域でのサポート活動の立ち上げに協力してみたいか

「少し」であれ「かなり」であれ，他地域での住民によるサポート御活動興味を持つサポーターが9割以上（91%）存在している。また，程度の差はあれ，「他地域でのサポート活動の立ち上げに協力すること」に前向きの姿勢を持つ人がおよそ8割（77%）みられる。

5　おわりに

高齢化が進む中で，地域は今後ますます重要な役割を果たすことを期待されることになる。

第一に，高齢者とりわけ援助の必要な高齢者がが継続して住み続けられる場として機能していくことである。地域は要介護高齢者の生活の場である。こうした高齢者には，まず介護保険を利用するという選択肢が用意されている。介護保険でまかないきれないサービスは，大きく言って，家族か，市場か，行政かそれ以外から調達するしかない。地域は「それ以外」のなかで大きな役割を果たす可能性を持っている。地域に多くの組織が登場しているが，さまざまな組織の特徴を生かして，インフォーマルで制度にしばられないサービスを作り出せるのも地域の組織の強みである。

第二に，地域は，そこに住む住民にとっての自己実現の場であり，生活の場である。地域はその機会を提供する役割を期待されている。とりわけ団塊の世代が定年を迎え，大量の住民が地域で「第二の人生」を模索している。地域で生活支援活動を担う人々にとって，地域は，そこで自分がそれまで蓄えた知識や技能を活かして活躍できる場，自己実現の場となっていく。

本論文では，人々が生活支援活動に参加するなかで，地域のなかにに自分の新しい役割と居場所を発見していく過程を見た。活動の中でサポーターたちに共通してみられた資質・特徴をここで簡単に要約してみよう。

（1）進取の気性：新しいことを始めることをためらわない
（2）学習指向：学習によって知見を広めることへの積極的な姿勢がある
（3）地域社会への貢献指向：自分の力を地域のなかで活かし地域貢献したいという強い願望がある
（4）行動力：他人の家に1人で出向いて役割を果たしてくる力が育成されている
（5）コミュニケーション力：困った時だけでなく不断に仲間や関係者と連絡・相談する力を持っている
（6）楽しむ力：知見の広がり，仲間との交流，困難な事態の解決を「嬉しい」と感じる感性がある。
（7）組織運営の力：誰かに決定を任せず，他者の意見を聞き，自分の考えをを表明し，話し合いで合意に達する力がある
（8）他者への関心：これまで気に留めなかった他者（主として弱者）への関心が強まっている
（9）自分の地域への関心：これまで気に留めなかった地域の出来事に関する関心が強まっている
（10）他地域への関心：他地域で同じような支援組織を立ち上げることへの理解と協力の姿勢がある
（11）自分自身への関心：高齢期を迎える自分の今後の生き方の青写真が明確なものになってきた

こうしてみると，住民が活動に参加することによって得た資質や能力は多彩であり，そのどれも支援活動そのものだけでなく「サポーター会議」や「部会」等それを支えるさまざまな運営活動によっても得られていることが分かる。

大垣市のこの生活支援活動は，運営方法の決定を含めた運営全体が「参加型」であった。何事もメンバーが意見を出しあい，納得するまで話し合いって決める。このルールを4年にわたる活動のなかで作り上げてきた。いわば直接民主主義の実践の場であった。参加し，他者の意見に耳を傾けながら自分の意見も言い，最終的に決定に参加する。そのあとは決定に従って行動するが，疑問が生じたとき

はまたメンバーが話し合って決める。このような会の運営パターンが活動参加者に活動を「ためになる」「楽しい」と思わせているのだろう。そう思えたメンバーはさらに参加へのモティベーションが触発・強化され次の活動へ積極的に取り組むことになる。仲間も増えていく。この繰り返しである。つまり，生活支援の実践活動そのものだけでなく，運営にも可能な限り直接参加することでメンバーのモティベーションが上り，結果として活動実績が上がる，という循環が形成されていた。

それを実現するためにこの会がとってきた方法の一つが「専門家の介在・参加」であった。立ち上げの際には介護の専門職（ケアマネジャー・ヘルパー等）が日常的に会の運営に関与した。専門家を必要に応じて招待し，講義や講演を開催した。これは国の補助事業の予算を利用して行った。こうした機会を通してメンバー各自の知見が広がるだけでなく，知見と経験を共有する「仲間」が形成されていったのである。会の立ち上げ時の介護の専門家の介入・指導，さらにそれ以降サポーターたちの後方支援。こうした関係を介護専門職が継続したことが第一の方法であった。

二つ目の方法は，「サポーター会議」といいう実質的な最高意思決定機関の外に，あるいはその下にいくつかの実働部隊，実行委員会を作っていったことである。この中でも「参加者が十分話し合って決める」という方法が貫かれている。

地域における生活支援のニーズは今後増大していくと思われる。地域には，それを満たすさまざまな主体・組織が存在している。家族，民間企業，行政，社会福祉協議会等さまざまである。今回取り上げたＮＰＯはそれらの中で独自の目的と方針を持って活動している。強いて分類すれば「協セクター」になるだろうが，運動の形成・継続には民間の介護事業差者も行政も研究者も参加している。こうした形態は今後の住民参加による地域の生活支援活動の一つの方向を示していると言えるだろう。

参考文献

・全国社会福祉協議会，2008年６月『これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告　地域における「新たな支え合い」を求めて―住民と共生の協働による新しい福祉―』
・武川正吾，2007年，『連帯と承認』東京大学出版会
・これからの地域福祉のあり方に関する研究会2008年３月『地域における「新たな支え合い」を求めて―住民と共生の協働による新しい福祉―』特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター
・安立清史，2008年『福祉ＮＰＯの社会学』東京大学出版会
・世古一穂，2009年『参加と協働のデザイン』学芸出版社
・太田貞司，2010年『地域ケアシステムとその変化主体』光生館
・古橋貞二郎，2011年『介護の「地域力」を高める』岩波書店
・須田木綿子，2011年『対人サービスの民営化』
・上野千鶴子，2012年「ケアの社会化と新しい公共性」盛山和夫他編『公共社会学２―少子高齢社会の公共性―』

※本論文は文部科学研究費補助金　基盤研究（c）22530538を受けて作成した。